

互いに想い合うこと

新潟県立村上中等教育学校三年 鈴木 理南

皆さんは人の前に立ったことがあるでしょうか。集団で何か活動すると一番目立つのはやはり全員の前に立つ「リーダー」でしょう。私は「リーダー」と聞くとみんなの主役、誰よりなくてはならない存在、というイメージが強くありました。しかし、私が受けた道徳の授業で「一人」だけでは前に立つことができないということを知りました。

集団生活の中では、主役はリーダー、脇役はその周りの人、サポーターとなります。

「リーダー」は主に全体をまとめ、物事を進めていく人を指すでしょう。「サポーター」はリーダーのサポートが大きな役目です。リーダーに比べればサポーターの仕事は小さなものかもしれません。しかし、これがなかったらどうなるでしょうか。合唱に置き換えて考えてみましょう。

合唱でいえばリーダーは指揮者、サポーターは伴奏者や歌う人たちです。これらが集まれば素晴らしいハーモニーを奏でることができるでしょう。しかし、指揮者だけではそれはできません。それどころか音を出すことさえできないでしょう。そうすると、伴奏者や歌う人たちの存在が必要不可欠であることがわかります。

道徳の授業で、私は、「寅さんシリーズ」の監督である山田洋次さんの書いた「脇役の力」という文章を読みました。その中には「脇役がいてこそ主役が輝く」とあります。映画の中で、周りにいる脇役が技術的に高い芝居をすることによって、主役の存在感を浮き立たせるのだそうです。これは私たちの集団生活でも同じことが言えるでしょう。すると「サポーターがいてこそリーダーが輝く」となります。しかし、これではリーダーよりもサポーターばかりが重要なように聞こえてきます。本当にそうなのでしょうか。

では逆に、合唱で指揮者がいないとどうなるのか考えてみましょう。まず、指揮者がいないと音楽の速さや強弱がまるでわかりません。そもそも始める合図をしなかったら曲自体が始まらないでしょう。必要不可欠な点では指揮者も同じなのです。

そして、合唱の「サポーター」の中にもテノール、アルト、ソプラノなど、沢山の役割があります。もし、どれか一つでも欠けてしまったらどうなるでしょうか。ただそれだけでその合唱が何か物足りないものになってしまいます。だから、サポーターは大勢いても、誰一人欠けることがあってはならないのです。

すなわち、指揮者、伴奏者、全ての歌う人たちが集まって初めて素晴らしいハーモニーを奏でることができるのです。集団の中で誰か一人だけが重要ということではなく、リーダーもサポーターも、また、サポーターの中の誰か一人でも、欠けてはならない大切な存在なのです。

これは、私たちの社会に広くあてはまることではないでしょうか。例えば先日行われた参議院議員選挙では投票率が低く、その背景には若者の政治への無関心が指摘されています。しかし、これには若者が政治に触れ、考える場を作ってこなかったリーダー、ここでは年輩の方や政治家の側にも責任があるのではないのでしょうか。たとえば、政治家の話を聞いたり、討論したりするなど政治が実感できる場を、小学生のときから経験できるようにしてほしいと思います。その時一方通行ではなく、お互いの立場や思いを伝えあい理解

できれば、その積み重ねで将来若者の政治への関心が育っていくはずですが。もちろん、若者も自分の責任を感じずリーダーに頼っているばかりではいけません。自身がこれから生きてく社会や、政治に携わる人に関心を持ち、行動してゆく真摯な姿勢が求められます。そのように、リーダーとサポーターがお互いの存在を見つめ尊重し合うことができたとき、はじめて本当のよりよい社会を築いていけるのではないのでしょうか。

どちらか片方が相手を想っているだけではまとまることはできません。もうその時点でお互いの共感が閉ざされてしまうからです。だから、どのような立場であれ全員が「誰もが不可欠の大切な存在」であることを頭に置き、お互いに思い合いながら活動することが大切です。全員で共感することから誰もが参加する環境ができていくのです。そうすれば、きっと私たちの社会から今まで以上にすばらしいハーモニーが聞こえてくることでしょう。